

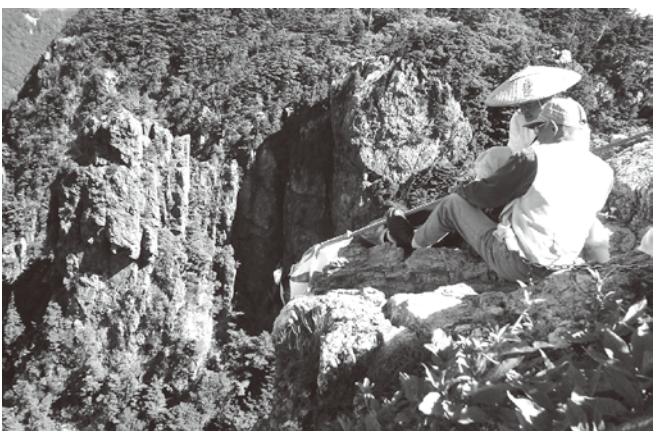
森とともに生きて… 信仰の山

国土の大半を山地が占める日本列島において、山に対する自然崇拜と仏教は融合し修驗道を生み出しました。神靈の鎮まる山は本来、人間がみだりに立ち入る世界ではなく、限られた淨行者のみが近づける神仏の世界でした。科学技術の発展によって、ともすれば人間が驕りに陥りやすい現代こそ、信仰の山と自然を畏れ敬う山岳言仰がつづきることは多いと言えます。

日本人はいつから
山に登つたのか

スポーツや武道で「山に籠つて修行」すれば、なにやらものすごく上達し、達人になれるようなイメージを私たちはもっています。これは山という自然の高みが日常生活空間である里から離れ、神聖な空間、靈地とみられたことと無関係ではありません。

大峯山の女人結界門



大峯修行で行われる「西の覗」

登頂、開山する修行者が法体で僧形、山の神靈が女神で女身、登頂を援助する狩人などの山の民が俗体の神に象徴され信仰対象となつており、仏教思想に屈服し、零落した神靈は鬼、大蛇、山姥などの伝説として語られます。ただ、山の神聖な空間は厳しい潔斎を経た淨行者にしか開かれておらず、誰もが簡単に山に登れたというものではありません。現在でもヒマラヤやアルプスへの登頂には、それに耐えうる体力、精神力、技術力が要求されるのと少し似ています。

このようにして我が国の靈山、名山は「開山」されていきますが、山に入り神仏に近づき、修行者が神仏から頒けられた力は驗力と呼ばれます。この驗を得るために修行するのが修

驗で、彼らは山中に籠り、山に臥すことからやがては山伏とも呼ばれるようになっていきます。心機一転、「山に籠つて修行」するというのもこのあたりになにやら起源があるようです。山岳修行で得た超人的な体力、精神力以外にも薬草知識は現実的な驗力のひとつで、奈良県に製薬業が盛んなのも吉野や葛城といった靈山の薬草の効能と無関係ではありません。

このように山に対する畏敬をもとにした自然崇拜を底流にして、密教や道教的な神仙思想などが融合して生まれた信仰が修驗道です。我が国では信仰の山は拝む山、祀る山から飛鳥～奈良時代には修行する山になり、その後、山中に山岳寺院の堂社などができる、やがては

参る山ともなつていきます。日本人が山頂に登るのは近世以前には信仰目的に限られていましたと言つてもよいでしょう。

卷之三

信仰の山にはなりません。神聖性というもの
はこうした禁忌、禁制があつて保たれるもの
と言つてよいでしょう。近代アルピニズムは
悪魔の世界である山岳空間をキリスト教の力
で征服するといった西洋文明が生み出したも
のですから、山の神仏の存在を否定します。
山は人間に征服される单なる隆起した自然地
形としかみませんので、明治以降に始まる近
代登山は日本の靈山、名山の多くを「ただの山」
にしてしまいました。

十世紀の中国で記された『義楚六帖』には吉野金峰山（大峯山）の記述があり、女人が登れないことと記しており、男子が登る場合は三ヶ月の酒肉欲色を断つことが求められるとも記しています。この「女人禁制」について

はさまざまに議論されるところですが、古代においては邪馬台国の女王卑弥呼のように女性が神の託宣者として宗教上も高い地位を占めていたことは確かです。女性の入山禁忌の理由は女神である山の神が同性を嫌うという信仰に基づくといった説もあり、仏教戒律を起源にするとされていますが、近世には不淨である女人は清浄な山には入れないといった女性蔑視から理由づけられていたこともまた事実です。古代において神仏の世界である山は男女を問わず人の立ち入りそのものが禁制で、人の踏み入る余地などありませんでした。禁忌、禁制と信仰の山は不可離のものですが、性別の規制ではなく、入山時の精進潔斎や登拝時期など宗教的な規制によつても靈山の神聖性は確保できるようにも思われます。

日本人はともすれば信仰や宗教には鈍感で、正しい考え方であつても自らの思想を強引に押し付け、人の信仰を踏みにじるような行動は褒められるものではありません。科学技術の発展により私たちは多くの恩恵を受けていますが、終には自らの生存を脅かす力さえ持つようになつてしましました。それでも自然の猛威の前には人間の力など無力です。驕慢を捨て、謙虚に自然を畏敬してきた山岳信仰から学ぶべきことは、多いといわねばなりません。吉野大峯が世界遺産に登録され、人類普遍の価値が国際的に認められたのは信仰の山であるからだということを、今一度思い起

とみられています。稻作農耕が行われる弥生時代以降は、山は農耕に不可欠な水源として山の神靈は水の神、農耕神として信仰されたりして崇敬畏怖され、立ち入りは禁忌であったとみられ、むやみに立ち入ることは神を冒瀆することで、神の怒り、祟りをまねくと考えられていました。江戸時代においてもアイヌの人々は神聖な山の頂上は踏むことは絶対になかつたといいます。

三輪山（四六七m）は円錐形の整った山容をもつ「神奈備山」で、大和一円の信仰を今も集める大神神社の「神体山」とされます。その信仰は山麓の祭祀遺跡から確実に古墳時代まで遡ることは明らかで、平地から神々の世界である山を仰ぎ祀るという古い信仰のあり方を今に伝えています。こうした尊い神靈参る山ともなっています。日本人が山頂に登るのは近世以前には信仰目的に限られていますと言つてもよいでしょう。

信仰の山と神聖性

霊山や名山と呼ばれる山は信仰の山である以上、神仏の世界と俗界との結界が存在し、この結界を越えるためにはなんらかの宗教的な規制や禁制が存在しています。山に入る前の精進潔斎、水垢離や禊などもこのひとつです。神仏の世界に入るためには身も心も清浄にして神仏に近づく資格が求められるわけです。こうした制約や禁制が無く、誰もがいつでも登れる山ならば山の神聖性は存在せず、信仰の山にはなりません。神聖性というものにはこうした禁忌、禁制があつて保たれるものと言つてよいでしょう。近代アルビニズムは悪魔の世界である山岳空間をキリスト教の力で征服するといった西洋文明が生み出したものですから、山の神仏の存在を否定します。山は人間に征服される单なる隆起した自然地形としかみませんので、明治以降に始まる近代登山は日本の靈山、名山の多くを「ただの山」にしてしまいました。

十世紀の中国で記された『義楚六帖』には吉野金峰山（大峯山）の記述があり、女人が登れないこと記しており、男子が登る場合は三ヶ月の酒肉欲色を断つことが求められます。この「女人禁制」についても記しています。

ツジ、シャクナゲ、杉葉、檣、笹などは神の拠代であることがわかります。この山での神迎えの祭りは「記紀」の国見や国ほめなどの予祝、歌垣ともつながり、お花見や文字通りの「遊山」にもつながっていくものとみられます。

飛鳥～奈良時代になると人跡未踏の山々の奥深くに踏み込み、登ることなど考えもおよばなかつた険しい高山の山頂に登攀し、神仏により近づき、その力を得ようとする仏教や道教的な神仙思想をもつ人々が現れます。「近畿の屋根」とも称される大峰山脈においても山上ヶ岳（一七一九m）や弥山（一八九五m）の山頂付近では八世紀の遺物の散布が確認でき、奈良時代には確実に登頂されていることが確認できます。こうした古代の山の修行者を象徴化した人物が修驗道の開祖として崇められる役小角（役行者）です。山岳信仰では

はさまざまに議論されるところですが、古代においては邪馬台国の女王卑弥呼のように女性が神の託宣者として宗教上も高い地位を占めていたことは確かです。女性の入山禁忌の理由は女神である山の神が同性を嫌うという信仰に基づくといった説もあり、仏教戒律を起源にするとされていますが、近世には不淨である女人は清浄な山には入れないといった女性蔑視から理由づけられていたこともまた事実です。古代において神仏の世界である山は男女を問わず人の立ち入りそのものが禁制で、人の踏み入る余地などありませんでした。禁忌、禁制と信仰の山は不可離のものですが、性別の規制ではなく、入山時の精進潔斎や登拝時期など宗教的な規制によつても靈山の神性は確保できるようにも思われます。

日本人はともすれば信仰や宗教には鈍感で、正しい考え方であつても自らの思想を強引に押し付け、人の信仰を踏みにじるような行動は褒められるものではありません。科学技術の発展により私たちは多くの恩恵を受けていますが、終には自らの生存を脅かす力さえ持つようになつてしましました。それでも自然の猛威の前には人間の力など無力です。驕慢を捨て、謙虚に自然を畏敬してきた山岳信仰から学ぶべきことは、多いといわねばなりません。吉野大峯が世界遺産に登録され、人類普遍の価値が国際的に認められたのは信仰の山であるからだということを、今一度思い起

森下 恵介（奈良市埋蔵文化財調査センター所長）

の鎮まる山の山頂への立ち入りは、神祭りの時には許され、県内の民間習俗に見られる春の山登り（ダケ登り、ダケ詣り、ヤマガリ）などは山からの神迎えの祭りと見られ、その拠代であることがわかります。この山での神迎えの祭りは、「記紀」の国見や国ほめなどの予祝、歌垣ともつながり、お花見や文字通りの「遊山」にもつながっていくものとみられます。

飛鳥～奈良時代になると人跡未踏の山々の奥深くに踏み込み、登ることなど考えもおよばなかつた険しい高山の山頂に登攀し、神仏により近づき、その力を得ようとする仏教や道教的な神仙思想をもつ人々が現れます。「近畿の屋根」とも称される大峰山脈においても山上ヶ岳（一七一九m）や弥山（一八九五m）の山頂付近では八世紀の遺物の散布が確認でき、奈良時代には確実に登頂されていることが確認できます。こうした古代の山の修行者を象徴化した人物が修驗道の開祖として崇められる役小角（役行者）です。山岳信仰では

はさまざまに議論されるところですが、古代においては邪馬台国の女王卑弥呼のように女性が神の託宣者として宗教上も高い地位を占めていたことは確かです。女性の入山禁忌の理由は女神である山の神が同性を嫌うという信仰に基づくといった説もあり、仏教戒律を起源にするとされていますが、近世には不淨である女人は清浄な山には入れないといった女性蔑視から理由づけられていたこともまた事実です。古代において神仏の世界である山は男女を問わぬ人の立ち入りそのものが禁制で、人の踏み入る余地などありませんでした。禁忌、禁制と信仰の山は不可離のものですが、性別の規制ではなく、入山時の精進潔斎や登拝時期など宗教的な規制によつても靈山の神性は確保できるようにも思われます。

日本人はどうすれば信仰や宗教には鈍感で、正しい考え方であつても自らの思想を強引に押し付け、人の信仰を踏みにじるような行動は褒められるものではありません。科学技術の発展により私たちが多く恩恵を受けていますが、終には自らの生存を脅かす力さえ持つようになつてしましました。それでも自然の猛威の前には人間の力など無力です。驕慢を捨て、謙虚に自然を畏敬してきた山岳信仰から学ぶべきことは、多いといわねばなりません。吉野大峯が世界遺産に登録され、人類普遍の価値が国際的にも認められたのは信仰の山であるからだということを、今一度思い起